

国内における Person-Centered Experiential Approach の研究分布図 ～学会誌を中心として～

関西大学大学院心理学研究科博士課程後期課程 小野真由子

関西大学心理臨床センター 河崎 俊博

要約

本研究の目的は、日本国内における Person-Centered Experiential Approach の研究分布を明らかにすることである。学会誌である『心理臨床学研究』と『人間性心理学研究』に焦点をあて、本研究の対象であると判断した論文 162 編を、年代別の傾向、引用文献、研究領域の 3 つの観点から概観した。その結果、国内における PCEA の研究は、年々増加傾向にあることが確認された。また日本国内の研究は、Carl Rogers の実践や哲学に基づく PCA 研究 (40 編)、Carl Rogers の実践や哲学から発展しているエンカウンター・グループ研究 (35 編)、Eugene Gendlin の研究や実践に基づくフォーカシング研究 (87 編) という 3 つに分けられた。各研究領域においては、事例研究が大半を占めており、それぞれの理論に基づいた新たな実践にも取り組まれていた。その一方で、PCA 研究における効果測定を目的とした数量的研究、エンカウンター・グループ研究における理論研究、フォーカシング指向におけるグループ研究の報告数が少ないことも明らかになった。今後は、本研究で明らかになった報告数の少ない研究領域に対して取り組んでいくことで、国内の PCEA 研究の発展につながると思われる。

キーワード：パーソン・センタード・アプローチ、フォーカシング、エンカウンター・グループ、PCEA 研究分布図、文献研究

I 問題と目的

パーソン・センタード・アプローチ (Person-centered approach、以下、PCA) は、心理療法のパイオニアである Carl Rogers によって創始されたアプローチであり、現在では、パーソン・センタード・エクスペリエンシャル・アプローチ (Person-centered experiential approach、以下、PCEA) として広く知られている。Sanders (2003/2007) によれば、PCA には、古典的クライエントセンタード・セラピー (Classical client-centered therapy) やフォーカシング指

向心理療法 (Focusing-oriented psychotherapy)、体験的セラピー (Experiential therapy) といった諸派 (tribe) が存在する。

PCEA の実践や考え方は、日本国内においても定着しておりダイナミックに発展してきた (坂中, 2015)。一方で、我が国における実践上の広がりの中で、技法として傾聴という言葉だけが一人歩きしてしまい、傾聴はただ頷いて言葉を繰り返しているだけであると誤解されてしまう (中田, 2014) ことや、共感や受容を特徴とする日本文化の中で、自らの存在をなくしてまで受け入れることが受容であるというような誤

解(保坂, 1988)も生じてきた。このような課題に対して、中田(2014)は、PCEAを基盤とする研究者や実践家たちが実践上の特徴を説明していく必要があると指摘している。実践上の特徴を説明していくためには、まず国内の研究者や実践家たちが、過去にどのような研究を行ってきたのか把握する必要性が考えられる。

国内におけるPCEAの研究動向を調査した論文を調べてみると、大学紀要を中心に文献リストを作成し、年代ごとの傾向を検討した坂中(2015)の報告のみで、学会誌も含めたPCEAに関する文献研究はあまり見られない。そこで本研究では、わが国のPCEAの実践上の特徴を検討する一歩として、PCEAに関する研究動向を調べ、研究分布図を作成する。また、分布図作成にあたり、明らかになった特徴についても報告する。

II 方法

本研究では、1984年から2016年10月現在までに、『心理臨床学研究』、『人間性心理学研究』の2誌いずれかの学術誌に掲載された論文を対象とした。PCEAに関する論文であると判断する基準は、PCAを諸派として捉えるSanders(2003/2007)の見方を参考とした。

まずはパーソン・センタード・アプローチの創始者であるCarl Rogersである。次に、フォーカシングを見出したEugene Gendlin、体験的パーソンセンタード・セラピー(Experiential person-centred therapy)を考案したLeslie Greenberg、統合的パーソンセンタード・セラピー(Integrative person-centred therapy)を実践し始めたRichard Worsleyの4名である。また諸派には含まれていないが、PCAの新しい展開として紹介されている、表現セラピー(Expressive therapy)のNatalie Rogers、プリ・セラピー(Pre-therapy)のGarry Proutyを含めた6名である。6名のうち、いずれかの文献が引用文献に含まれている場合、あるいは『ロ

ジャーズ辞典』(Tudor & Merry, 2002/2008)に掲載されているキーワードが、論文のタイトルかキーワードのいずれかに掲載されている論文を本研究の対象とした。

III 結果と考察

引用文献に6名の創始者(Rogers, C., Gendlin, E., Greenberg, L., Worsley, R., Rogers, N. & Prouty, G.)、あるいは、『ロジャーズ辞典』(Tudor & Merry, 2002/2008)に掲載されたキーワードを含んでいた論文数は、次の通りである。『心理臨床学研究』は、全1532編のうち137編が該当し、『人間性心理学研究』は全425編のうち94編が対象となった。2誌合わせて、231編であった。この231編の論文のなかには、他学派の実践においてPCEAの概念を使用していた論文も存在していたため、それらの論文は本研究の対象外とした。その結果、最終的に調査の対象となった論文は、『心理臨床学研究』95編、『人間性心理学研究』67編で、2誌合わせて162編であった。

1) 年代別の傾向

10年ごとに年代を区切った論文数の推移は図1の通りである。全体的には、PCEAに関する論文は年々増加傾向にあった。『心理臨床学研究』は、年代の推移と共に増加傾向にあった。一方、『人間性心理学研究』は、1980年代から2000年までは増加傾向にあったが、2000年代は前年よりわずかに減少していた。

1980年代の研究は、19編(心理臨床学研究8

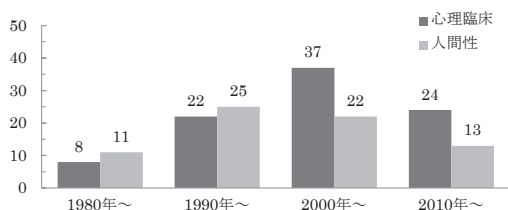


図1 年代ごとの論文数の推移

編、人間性心理学研究 11 編）であった。この年代の特徴として、Rogers が後年に実践したエンカウンター・グループ（Encounter group）に関する研究（野島，1985）が、積極的に行われていた。また学校領域において、小学生から成人に至るまでの幅広い年齢を対象としたエンカウンター・グループが実践され、参加者の属性やファシリテーションについて言及されている研究が見受けられた（保坂，1983；畠瀬，1984）。

1990 年代の研究は、47 編（心理臨床学研究 22 編、人間性心理学研究 25 編）であった。この年代でも、エンカウンター・グループに関する研究が取り組まれており、エンカウンター・グループのグループプロセスに関する研究（平山，1993）が報告されていた。その他にも、フォーカシングに関する実践研究や、『セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件』（Rogers, 1957/1966）で論じられている 6 条件（以下、必要十分条件）の中でも、中核条件の一つとされている「共感的理解（Empathic Understanding）」を取り上げた研究が積極的に行われていた（角田，1995）。

2000 年代の研究は、59 編（心理臨床学研究 37 編、人間性心理学研究 22 編）であった。この年代から、必要十分条件（Rogers, 1957/1966）に関する理論研究（岡村・保坂，2000）といった PCA 概念の再検討を目的とした研究や、「PCA Group」（鎌田・本山・村山，2004）、「フォーカシング的態度（Focusing Attitude）」（福盛・森川，2003）などをキーワードとした研究が見られ出した。

2010 年代の研究は、37 編（心理臨床学研究 24 編、人間性心理学研究 13 編）であった。これまでクライアントの体験に焦点をあてた研究が中心であったが、この年代では、セラピストの体験理解（山崎，2013）やセラピストフォーカシング法（吉良，2002）など、セラピスト側の要因に焦点をあてた研究が行われていた。また、フォーカシング研究においては、体験過程

流コラージュワーク（矢野，2010）が考案されるなど、他の手法と掛け合わせた新たな実践方法が報告されていた。

2) 引用文献の特徴

全 162 編のうち、Rogers の文献を引用した論文は 72 編、Gendlin の文献は 95 編であった（そのうち、両者の文献を引用した論文は 42 編）。Greenberg では 4 編、Worsley では 1 編、Natalie Rogers では 1 編、Prouty では 1 編、それぞれ引用していた。Gendlin の文献引用が最も多く、次いで Rogers、Greenberg、Prouty であり、Worsley と Natalie Rogers は同程度の引用数であることがわかった。このことから、日本国内においては、PCA 諸派に関する研究よりも、Rogers や Gendlin の文献を参考にした研究が積極的に行われる傾向があることが考えられた。また、引用されていた文献の詳細を見ると、Rogers の引用文献の中では、72 編中 23 編が『セラピーにおけるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件』（Rogers, 1957/1966）を引用しており、Gendlin の引用文献の中では 95 編中 52 編が『フォーカシング』（Gendlin, 1981/1982）を引用していた。Greenberg や Worsley、Natalie Rogers は同じ文献が引用されている論文はなかった。

3) 各研究領域の分布

PCEA の研究分布を明らかにするため、研究領域から 3 つに分類した。まず Rogers の思想哲学に基づいた「PCA 研究」と、Gendlin の研究や実践に基づいた「フォーカシング研究」に大別した。また PCA 研究のなかでも、エンカウンター・グループ研究は、多数報告されていたため「エンカウンター・グループ研究」とその他の「PCA 研究」に分類した。次に、PCA 研究、エンカウンター・グループ研究、フォーカシング研究を、研究スタイルから「事例研究」、「理論研究」、「量的研究」、「発展研究」の 4 つに分類した。本研究における「事例研究」とは、

事例を用いてPCEAの概念や現象について検討した研究のことである。また、論文内の事例数によって「単一事例」、「複数事例」という下位分類も設けた。「理論研究」は、文献に基づいてPCEAの概念や理論的検討を行っている研究である。「量的研究」は、測定尺度の作成や効果測定を目的とした数量的研究のことである。「発展研究」とは、PCEAの概念を用いた新たな実践に関する研究である。加えて、PCA研究においては、「PCA Group」という新しい実践に関する論文が複数存在したため、「PCA Group」と「その他の新たな実践」という下位分類を設けた。エンカウンター・グループ研究では、ファシリテーターに関する研究が行われていたため、「Facilitator 論」という下位分類も設けた。フォーカシング研究においては、セラピストフォーカシングといったセラピスト側に焦点をあてた研究も行われており、「セラピストに関する研究」と「その他の新たな実践」という下位分類を設けた。

① PCA に関する研究

単一事例を検討した事例研究は、9編であった。転換性障害を抱えるクライアントに対するセラピストの共感的理解の難しさを検討した研究(佐伯, 2012)や、吃音を主訴とした幼児とのプレイセラピーにおける受容に関する研究(岡本, 1996)など、さまざまな疾患や主訴を抱えるクライアントとの面接について、PCAの概念を用いて検討する事例研究が存在した。また9編中7編は、Rogers(1957/1966)の論文「セラピーにおけるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件」を引用していた。

複数事例を検討した事例研究は、3編であった。そのうち2編は、クライアントの内的努力に注目し、心理面接の意義を問い直す論文であった(増井, 1987, 1996)。もう1編は、Rogersの自己概念に関して、青年期の自尊感情という観点から検討した論文であった(井上, 2003)。また、PCAに関する事例研究は、複数事例に基づいた研究よりも、単一事例を検討した事例研

究が多数行われていることがわかった。

文献を検討した理論研究は、8編であった。クライアント—セラピストの相互作用に着目したクライアント中心療法の理論的・技法的な展開に関する研究(保坂, 1988)や、治療的人格変化の必要十分条件に関する技法論的展開と理論的展開の検討(岡村・保坂, 2000; 保坂・岡村, 2003)、Rogersの中核条件に関するセラピスト側に注目した研究(中田, 2013)などが挙げられる。その他の研究者の論文も複数存在するが、特に上記3名の研究者がPCAの理論的側面と実践的側面に関する研究を積極的に行っていた。

測定尺度や効果測定を検討した数量的研究は、田中(2008)の1編のみであった。田中(2008)の研究は、面接における共感プロセスを数量的に捉えて検討したものであった。

「PCA Group」を検討した発展研究は、7編であった。なかでも、鎌田・本山・村山(2004)と白井(2010, 2011)は、学校領域での実践に関して新たなグループ観を提唱し、質的研究と数量的研究の両側面から研究に取り組んでいた。

Rogers理論に基づいた新たな実践を検討した発展研究は、7編であった。具体的には、「PCA Group」のグループ観とも異なり、無目的であることを目的としたフリースクールの意義を検討している研究(押江, 2009)や、Rogersの自己理論を基盤に関係焦点化カウンセリングという新たな心理療法を提唱している研究(坂原, 2012)、セラピストの成長に焦点を当てた研究(小野, 1993, 2006)などが挙げられる。また、Natalie Rogersの表現アートセラピーを取り入れた研究(小野, 2003)も報告されていた。

PCA研究は数量的な検討が少なく、数量的には捉えにくい概念を対象としていることがその一因として推察された。今後は、PCAが着目する概念を操作的に定義し、効果測定を目的とした数量的研究にも積極的に取り組んでいく必要があると考えられた。

② エンカウンター・グループ研究

単一事例を検討した事例論文は、12編であっ

た。看護学生を対象とした報告や、海外で小学生を対象とした報告など、様々な参加者を対象とした事例が検討されていた（伊藤・増田, 1988；金・金・野島, 2006）。また、参加者のグループセッション内外の体験について言及した研究（保坂, 1985；中田, 1996）も存在した。

複数事例を検討した事例論文は、日米のエンカウンター・グループ体験の違いを比較した研究（畠瀬, 1984）と、エンカウンター・グループの教育的機能を考察した研究（広瀬, 1990）の2編であった。また、エンカウンター・グループに関する理論研究はみられなかった。

国内のエンカウンター・グループ研究は、40編中17編が、Rogers のエンカウンター・グループに関する著書（Rogers, 1970/1973）を引用文献に挙げておらず、日本国内の研究者の論文を引用しており、理論的な研究よりも実践的な研究が多くなされる傾向がうかがえた。

測定尺度の作成や効果測定を検討した数量的研究は、19編であった。エンカウンター・グループの効果として、自己像の肯定的変化や参加者の対人不安の軽減、共感の増大（鎌田, 2002）や、個人の変化や人間関係の変化（松浦, 2000）などが挙げられていた。また、体験過程の観点からの検討（坂中, 1998）なども見られた。

エンカウンター・グループにおけるファシリテーター論を検討した発展研究は、7編であった。具体的には、既知集団や仲間集団を対象とした際の運営の困難さについて、グループ運営の観点から言及した研究（安部, 1984, 2002）や、ファシリテーターの否定的な自己開示の意義を検討した研究（中田, 2001）が存在した。

エンカウンター・グループ研究では、文献を検討した理論研究が見られなかったため、今後エンカウンター・グループの実践がどのような理論的背景に基づいて実践されているのか検討する余地はあるだろう。

③ フォーカシング研究

単一事例を検討した事例研究は、23編であった。統合失調症を抱えるクライアント（増井,

1999）や境界例のクライアント（星加, 2007）に対してフォーカシング技法を用いた事例研究や、体験過程に触れることの意義（岡, 1996）、および体験過程に触れないことの意義（徳田, 2000）について論じた研究などが報告されていた。

複数事例を検討した事例研究は、10編であった。Clearing a space の観点から面接過程を考察した研究（吉良, 1994）や、フェルト・シフト体験とプロセスについての研究（池見, 1990）など、「現象としてのフォーカシング」について検討した研究が見受けられた。

文献を検討した理論研究は、7編であった。Gendlin 哲学を援用してセラピーにおける他者を論じた研究（久羽, 2013）や、フォーカシング技法のモデル化を試みた研究（大石, 1988）、フォーカシングへの新たな視点の提供と課題を提唱した研究（増井, 1990）などが存在した。

体験過程という概念を数量的に捉え、効果測定を検討した数量的研究は、24編であった。数量的な研究は、日本語訳版の体験過程スケールの検討（池見ら, 1986）から始まり、フォーカサー変数を検討した研究（田村, 1987）や、日常のフォーカシングの体験様式に関する研究（森川, 1997）、フォーカシング的態度に関する数量的研究（福盛・森川, 2003；上西, 2009；中谷・杉江, 2014）など、その他の PCEA の研究と比較しても数多くの研究が行われていた。

セラピストに焦点を当てた発展研究は、8編であった。セラピスト養成に関する研究（伊藤, 1999；押岡・勝倉・白岩, 2011）や、セラピストフォーカシング法（吉良, 2002）、心理面接におけるセラピストの体験を考察した研究（山崎, 2013；山内, 2016）などが見受けられた。

その他、Gendlin の研究に基づいた新たな実践に関する発展研究は、15編であった。たとえば、体験過程流コラージュワークと意味の創造について考察した研究（矢野, 2010）やイメージ療法を検討した事例研究（蒲生, 1998；松本, 2008）、アート・フォーカシング（春日, 2015）

など、多様な実践が行われていた。

フォーカシング研究をよくみると、大別して「技法としてのフォーカシング」と「現象としてのフォーカシング」の二通りの解説があり、事例研究ではフォーカシングの問いかけやクリアリング・ア・スペースの使用といった「技法としてのフォーカシング」が主として解説されていた。また、グループ研究も少ないことが明らかになった。今後は、「現象としてのフォーカシング」あるいは「観点としてのフォーカシング」から論じた事例研究や、フォーカシング指向によるグループ研究が期待される。

4) 分布図から読み取る日本国内のPCEAの特徴

以上の結果と考察を踏まえ、分布図を作成した(図2)。日本国内におけるPCEA研究の特

徴として、エンカウンター・グループ研究も含めたPCA研究が75編、フォーカシング研究が87編であることから、この2つが研究テーマとして積極的に取り組まれていることが明らかになった。加えて、PCA研究の中でも、エンカウンター・グループ研究は40編、その他のPCA研究が35編であり、PCA研究の中でエンカウンター・グループ研究が過半数を占めていることも確認された。また各研究領域において、事例研究が大半を占めており、それぞれの理論に基づいた新たな実践も取り組まれていた。その他、エンカウンター・グループ研究とフォーカシング研究においては、数量的研究が盛んに行われていた。日本国内のPCEAの研究では、体験的パーソンセンタード・セラピーや統合的パーソンセンタード・セラピーに関する研究報告が少ないため、今後積極的に取り組まれること

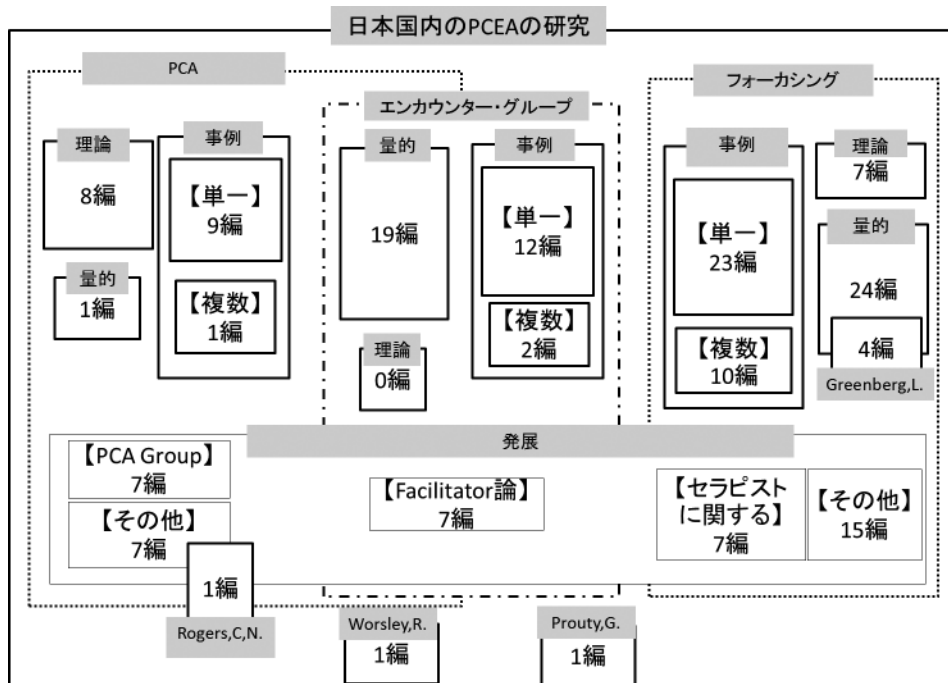


図2 日本国内のPCEAに関する研究分布図

が望まれる。

IV さいごに

本研究では、国内の学会誌に焦点をあて、PCEA の研究分布を調べてきた。その結果、国内の研究は「PCA」、「エンカウンター・グループ」、「フォーカシング」の研究に大別された。年代別の傾向や引用文献の特徴、研究領域による検討を行ったが、論文に掲載されているキーワードや引用文献からは、各領域における共通性を見出すことが困難であった。それは、多種多様な研究が特徴とも解釈できる結果であったが、PCEA の実践上の特徴をどのように説明していくのが、改めて考えさせられる結果であった。今後は、本研究で明らかになった研究報告数の少ない領域に取り組んでいくとともに、説明方法についても検討していくことが望まれる。

文献

- 安部恒久 (1984) 登校拒否児を持つ母線に対するグループアプローチ, 人間性心理学研究, 2, 110-120.
- 安部恒久 (2002) 既知集団を対象としたエンカウンター・グループのファシリテーション, 心理臨床学研究, 20(4), 313-323.
- 福盛英明・森川友子 (2003) 青年期における「フォーカシングの態度」と精神的健康度との関連, 心理臨床学研究, 20(6), 580-587.
- 蒲生紀子 (1998) こころの整理応急法としての「こころの壺」について, 人間性心理学研究, 16(2), 159-169.
- Gendlin, E. T. (1981). *Focusing*, Bantam Books.
- 村出正治・都留春夫・村瀬孝雄 (訳) (1982) フォーカシング, 福村出版.
- 畠瀬 稔 (1984) エンカウンターグループ経験における日米比較研究, 人間性心理学研究, 2, 79-97.
- 平山栄治 (1993) 参加者の個人過程の展開からみたエンカウンター・グループ発展段階, 心理臨床学研究, 11(2), 164-173.
- 広瀬寛子 (1990) 看護学教育における集中的グループ体験の教育的機能, 人間性心理学研究, 8, 77-89.
- 保坂 亨 (1983) エンカウンター・グループにおけるファシリテーターの問題について, 心理臨床学研究, 1(1), 30-40.
- 保坂 亨 (1985) エンカウンター・グループにおけるセッション外活動の影響—参加メンバーによる事例報告, 人間性心理学研究, 3, 46-57.
- 保坂 亨 (1988) クライアント中心療法の再検討, 心理臨床学研究, 6(1), 42-51.
- 保坂 亨・岡村達也 (2003) パーソン中心カウンセリングにおける「治療的人格変化の必要十分条件」の理論的展開, 人間性心理学研究, 21(1), 6-15.
- 星加博之 (2007) フォーカシング指向心理療法と境界例, 心理臨床学研究, 25(2), 217-227.
- 池見 陽・吉良安之・村山正治・田村隆一・弓場七重 (1986) 体験過程とその評定: EXP スケール評定マニュアル作成の試み, 人間性心理学研究, 4, 50-64.
- 池見 陽 (1990) フォーカシングにおけるプロセスの実存・現象学的観察, 人間性心理学研究, 8, 66-76.
- 井上光一 (2003) 青年期における自尊感情と独立的理想自己, 人間性心理学研究, 21(1), 16-26.
- 伊藤研一 (1999) カウンセリング訓練に求められる要素の考察, 人間性心理学研究, 17(2), 187-197.
- 伊藤義美・増田 実 (1988) 「箱根方式」による学生エンカウンター・グループの事例研究, 人間性心理学研究, 6, 36-48.
- 角田 豊 (1995) とらえ直しによる治療者の共感的理解とクライアントの共感性について, 心理臨床学研究, 13(2), 145-156.
- 鎌田道彦 (2002) 入学初期に必修授業として実施したエンカウンター・グループの効果の検討, 人間性心理学研究, 19(2), 82-92.

- 鎌田彦彦・本山智敬・村山正治(2004) 学校現場における PCA Group 基本的視点の提案, 心理臨床学研究, 22(4), 429-440.
- 春日菜穂美(2015) アート表現を用いた震災トラウマ・カウンセリング, 心理臨床学研究, 33(4), 390-400.
- 金 鉉喜・金 奎卓・野島一彦(2006) 母国語(韓国語)による保育児・小学生・中学生の「保護者の集い」の試み, 心理臨床学研究, 24(1), 65-75.
- 吉良安之(1994) 白責的なクライアントに笑いを生み出すことの意義, 心理臨床学研究, 11(3), 201-211.
- 吉良安之(2002) フォーカシングを用いたセラピスト自身の体験の吟味, 心理臨床学研究, 20(2), 97-107.
- 久羽 康(2013) セラピーにおける他者性についての現象学的考察, 心理臨床学研究, 31(3), 376-386.
- 増井武士(1987) 症状に対する患者の適切な努力, 心理臨床学研究, 4(2), 18-34.
- 増井武士(1990) フォーカシングの臨床適用に関する考察, 人間性心理学研究, 8, 56-65.
- 増井武士(1996) 「心の整理」としての面接, 心理臨床学研究, 14(1), 10-21.
- 増井武士(1999) 自閉的な分裂病の治療面接における一つの統合の試み, 心理臨床学研究, 17(4), 321-332.
- 松本明夫(2008) イメージ療法におけるイメージの体験過程に関する研究, 心理臨床学研究, 26(3), 269-278.
- 松浦光和(2000) ロジャーズ(1970)の考え方に基づいたエンカウンター・グループ効果測定尺度の構成, 人間性心理学研究, 18(2), 139-151.
- 森川友子(1997) フォーカシング的体験様式の日常化に関する因子分析的研究, 心理臨床学研究, 15(1), 58-65.
- 中田行重(1996) エンカウンター・グループにおけるセッション外体験の意義, 人間性心理学研究, 14(1), 39-49.
- 中田行重(2001) ファシリテーターの否定的自己開示, 心理臨床学研究, 19(3), 209-219.
- 中田行重(2013) Rogers の中核条件に向けてのセラピストの内的努力, 心理臨床学研究, 30(6), 865-876.
- 中田行重(2014) わが国におけるパーソン・センタード・セラピーの課題, 心理臨床学研究, 32(5), 567-576.
- 中谷隆子・杉江 征(2014) 日常的フォーカシング態度尺度の開発およびその信頼性・妥当性の検討, 心理臨床学研究, 32(2), 250-260.
- 野島一彦(1985) 構成的エンカウンター・グループにおける High Learner と Low Learner の事例研究, 人間性心理学研究, 3, 58-70.
- 岡 昌之(1996) 共感における体験過程と感触の意義, 心理臨床学研究, 13(4), 353-364.
- 岡本智子(1996) プレイセラピーにおける受容の限界と攻撃性の変容, 心理臨床学研究, 14(2), 173-184.
- 岡村達也・保坂 亨(2000) パーソンセンタード・カウンセリングにおける「治療的人格変化の必要十分条件」の技法論的展開, 心理臨床学研究, 18(3), 299-304.
- 小野京子(2003) パーソン・センタード表現アートセラピーにおける「からだ」, 人間性心理学研究, 21(2), 253-260.
- 小野 修(1993) 来談者から学ぶ対人援助者の成長, 人間性心理学研究, 11(1), 83-95.
- 小野 修(2006) 対人援助者成長の一方法, 人間性心理学研究, 24(2), 13-22.
- 大石英史(1988) “行為”の次元からみたフォーカシング論, 人間性心理学研究, 6, 49-58.
- 押江 隆(2009) 地域における無目的志向のフリースペース活動の意義, 心理臨床学研究, 27(1), 45-56.
- 押岡大覚・勝倉孝治・白岩紘子(2011) 心理療法家育成のためのフォーカシング指向グループへの継続参加とその効果に関する研究, 人間性心理学研究, 28(2), 165-176.
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and Sufficient

- cient Condition of Therapeutic Personality Change, *Journal of Consulting Psychology*, 21(2), 95-103. (伊東 博 (訳) (1966) パーソナリティ変化の必要にして十分な条件, ロジャーズ全集第4巻, 岩崎学術出版社, 117-140.)
- Rogers, C. R. (1970). *Carl Rogers on Encounter Groups*, Harper & Row. (畠瀬稔・畠瀬直子 (訳) (1973) エンカウンター・グループ — 人間信頼の原点 —, ダイアモンド社.)
- 佐伯明子 (2012) 「満ち足りた無関心」の態度が見られた転換性障害者への心理療法, *心理臨床学研究*, 30(2), 129-139.
- 坂原 明 (2012) 関係焦点化カウンセリングの考察と事例の検討, *人間性心理学研究*, 29(2), 125-138.
- 坂中正義 (1998) 体験過程の視点からみたエンカウンターグループでの相互作用, *人間性心理学研究*, 16(2), 146-158.
- 坂中正義 (2015) 日本におけるパーソンセンタード・アプローチの発展, 南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編, 9, 167-176.
- Sanders, P. (2003). Introduction-read this first. In P. Sanders (Ed.) *The tribe of the person-centred Nation*, Ross-on-Wye, PCCS Books. (近藤輝行 (訳) (2007) パーソン・センタード・アプローチの最前線, コスモスライブラリー.)
- 白井祐浩 (2010) PCA グループの視点から見た学級集団形成尺度の作成, *心理臨床学研究*, 28(4), 523-528.
- 白井祐浩 (2011) 適応モデルとは異なる視点の集団形成の可能性, *人間性心理学研究*, 29(1), 25-35.
- 田村隆一 (1987) Floatability: フォーカシングの成功に関わるフォーカサー変数, *人間性心理学研究*, 5, 83-87.
- 田中伸明 (2008) 応答交換構造からみた共感のプロセスの特徴, *心理臨床学研究*, 25(6), 682-691.
- 徳田完二 (2000) 体験内容に触れないことの意義, *心理臨床学研究*, 18(1), 46-57.
- Tudor, K. & Merry, T. (2002). *Dictionary of person-centred psychology*, Whurr publishers.
- 岡村達也・小林孝雄・羽間京子 (訳) (2008) ロジャーズ辞典, 金剛出版.
- 上西裕之 (2009) 日常生活におけるフォーカシング的態度の構造についての一考察, *人間性心理学研究*, 27(1), 69-80.
- 山内志保 (2016) 統合的心理療法におけるセラピストの現前性と自己開示に関する一考察, *心理臨床学研究*, 34(1), 63-72.
- 山崎 暁 (2013) 臨床心理面接で生じるセラピストの体験の理解と活用, *人間性心理学研究*, 31(1), 53-64.
- 矢野キエ (2010) 体験過程流コラージュワークと意味の創造, *人間性心理学研究*, 28(1), 63-76.

